

〈国語〉

社会生活へつなげていく「伝え合う力」の育成

——教科等横断的な視点と小中連携授業の交流を通して（第 1 学年）——

那覇市立松城中学校教諭 仲 地 孝 子

I テーマ設定の理由

新学習指導要領では、将来の予測が難しい社会の中でも、未来を作り出して行くために必要な資質・能力を確実に育む教育、社会と教育目標の共有を図り、社会に開かれた教育課程を重視している。これを受け、中学校国語目標には「社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける」視点が新しく位置づけされた。このことは、国語の授業において、言語生活を豊かにし社会生活へつなげていく力の育成が求められている。

生徒たちが歩んでいく社会生活の中には、地域社会など、人との関わりの場において、自分の考えを話したり、相手の意図するところを聞いたりしながら伝え合う能力が必要とされる。これまでの話し合い活動の授業実践を振り返ってみると、自分の意見を話すことはできても、相手を意識して話したり、聞いたりすることが苦手な様子が見られた。また、自分の考えを豊かな表現で書いても、分かりやすく話すことには苦手意識を持っている生徒も多い。このことは、教師側も交流場面において、相手意識や目的意識を持たせた交流活動の手立てを明確に示していなかったことにも起因する。

そこで本研究では、1 学年の「話し合いで理解を深めよう」の単元において、自分の考えを他者に効果的に伝え合うという「話すこと・聞くこと」の場面を設定する。その中で、生徒が主体的に考えて話すために、将来へ期待を持たせるよう学びを自分ごととして考えさせる事が有効であると考え。

よって、「働く意義や学ぶ意義」の視点を捉えた「総合的な学習の時間」との教科等横断を図りたい。本校は 1 学年のテーマを「地域に学ぶ」とし、職場体験活動から、働くことを通して社会生活を見つめ、自己の生き方・あり方を考え社会へつなげていくよう取り組んできた。将来の自分を考え、中学卒業後の進路や将来を見据え、職業に就き、社会人としての生活を送っていく中で、伝え合う力は必須であると考え。

また、小中連携を通して、教科の系統性を明確にしながら小中との学びをつなげることが必要であると考え。小学校からの学びが分断されてしまうと、生徒たちをよりよい成長へつなげることができなくなる。よりよい成長を促していくためには、学習指導要領を基に、学びの明確化が必要であり、それによって教師の授業の形や教え方も変わり、生徒に身につく資質・能力が変わってくる。

そのためには、小中の系統性を明確にして学びをつなげていく必要があると考え、中学校 1 学年の生徒（以下中 1）と小学校 6 学年の児童（以下小 6）との異年齢交流の場を設定し、学習指導要領の小中との違いに留意し指導を行っていく。中 1 の伝えたことに対し、小 6 からフィードバック後、再構成を行うという言語活動を位置づける。それによって中 1 には、言葉を通して異年齢に合わせて分かりやすい言葉を探したり、伝える内容を精選したりする力が育まれる。その際、中学生には自信をもって伝えることができるよう、小学生の児童においては、上級生との関りを成長へつなげていけるようにする。お互いが自分や他者の良さに気づき尊重する姿勢は、これからの社会生活へ向けて伝え合う力の育成へつなげられると考える。このことから、社会生活を意識させた交流活動の工夫において、社会生活へつなげていく伝え合う力を育むことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「話すこと・聞くこと」の学習指導において、社会生活へ向けて職業観を育む「総合的な学習の時間」との教科等横断、小中との連携授業における異年齢交流を通して、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むことができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 社会生活へつなげていく「伝え合う力」について

(1) 社会生活へつなげていく「伝え合う力」とは

『学習指導要領解説国語編』中学校目標には、「社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける」視点が新しく位置づけられ、これからの国語科において、社会生活へつなげていく国語の力を育成する学習指導が求められている。

吉富芳正（2017）は、変化が激しく常に新しい未知の課題に試行錯誤しながら対応していく社会の中で求められる力とは、「自ら学びを進めることができる力であり、自分の思いを伝える力、他者の思いを聞き取る力である」と述べている。

生徒たちにとって「伝え合う力」は、学校教育や家庭生活、諸活動や地域社会の中において育まれるものであり、相手意識や目的意識などの場の設定の工夫を行うことで、さまざまな状況などに応じて対応できるように、生きて働く力として培われていくものであると考える。

そこで本研究では、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を、「目的や場面に応じて、お互いの考えを尊重しながら、自分の思いや考えを伝えようとする力、相手の思いや考えを理解しようとする力」と捉え、生徒たちが将来の社会生活をイメージしながら、言葉による「伝え合う力」の育成を目指す。

(2) 「伝え合う力」の育成について

西村周（2005）によると、『「伝え合う力」を高めるためには、『理解』と『表現』における言語活動を繰り返しながら循環機能させるように指導することが必要である。』と示している。つまり「話す」ために「書く」、「書く」ために「読む」、「読む」ために「聞く」。そして、その循環を逆回りさせたり、各領域の循環をつないだりしていくことで、国語科教育としての「伝え合う力」の系統性を図れるものではないかということである。

「伝え合う力」の育成の場として、国語科の時間や各教科の時間、総合的な学習の時間、道徳科や特活の時間等が挙げられる。また、「伝え合う力」を生かす場として、学校生活や家庭生活、異年齢交流や地域社会等が挙げられる。このように授業を通して育成された力は、生活の中のさまざまな場において、生きて働く力として生かされていく。その関連を「伝え合う力」の育成と場の設定として図に表した（図1）。

そこで本研究では、「話すこと・聞くこと」の領域に焦点化し、場の設定の工夫を行うことで社会生活へつなげていく「伝え合う力」の育成について研究を進めていく。

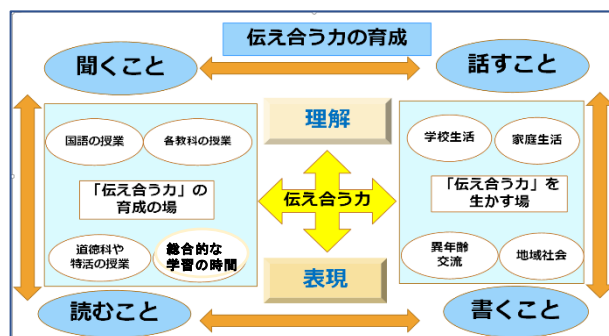


図1 「伝え合う力」の育成と場の設定

2 「総合的な学習の時間」との教科等横断について

『学習指導要領解説総合編』において、この時間の内容は「探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え」とあり、生徒は「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③情報を整理・分析したり、知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。要するに探

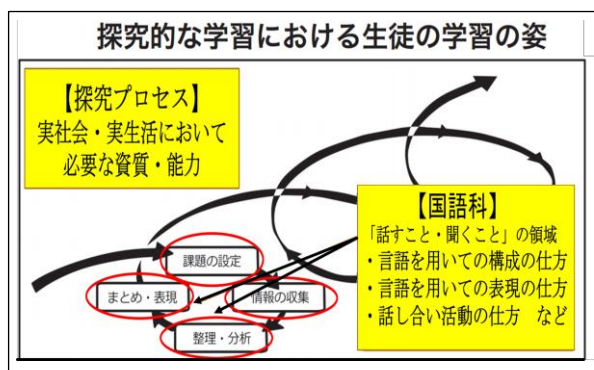


図2 総合的な学習の時間と国語科との教科等横断

究的な学習とは、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みのことである」と示されている。よって、探究プロセスによって身に付けた力は、生きる実社会・実生活の中において必要な資質・能力であると考え（図2）。

そこで本研究では、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むためには、学びを自分ごととして考えさせることが有効であると考え、「働く意義や学ぶ意義」の視点を捉えた総合的な学習の時間との教科等横断を図る。本校の1学年の総合的な学習の時間では、将来への夢や自分自身の生き方を考える「働くことを通して、社会生活を見つめ自己の生き方・あり方を考える」というテーマに沿って取り組んできた。その中で、職業人講話から学んだことを、国語の時間の教材として用い、探究プロセスの学習活動に関連させる。国語の授業で「伝え合う」場面において、探究プロセスの中の「整理・分析」「まとめ・表現」の部分に焦点化し研究を進めていく。相手に分かりやすく伝えるために、言語を用いての構成の仕方や表現の仕方、話し合い活動の工夫を通して国語科の授業改善へつなげていく。これらを踏まえ、国語科と総合的な学習の時間との教科等横断を図ることによって、社会生活へつなげていく「伝え合う力」の育成を図る。

3 小中連携授業の系統性について

『小・中学校学習指導要領の改訂』の教育内容の主な改善事項として、「発達の段階に応じた語彙の確実な習得、意見と根拠、具体と抽象を押さえて考えるなど情報を正確に理解し適切に表現する力の育成（小中：国語）」が明記されている。

那覇市は小中一貫の取り組みとして、義務教育9年間の発達段階を考慮した学びの構造として、4・3・2に区分している（図3）。これを受け、本校でも5年・6年・中1の中期段階において小中のきめ細やかな生活指導や学習指導を行っている。

小学校を卒業し、中学校へ入学する児童たちは、生活面や学習面において生活環境が大きく変化する。学校生活の中で学級や部活動、諸活動や地域活動等を通して、新しい出会いが始まり、自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考えを聞いたりする場が広がる時期である。環境の変化に伴い、相手意識や目的意識を明確にしながら、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育む大きな成長の節目でもある。そこで、中1の国語の授業においても同年齢の枠にとどまらない、社会生活を意識した異年齢交流の場の設定をする。さらに、学習指導要領を基に、小中の系統性を明確にしながら学びをつなげていくことが必要であると考え、中1と小6の異年齢交流の場を設定し研究を進めていく。

「話すこと・聞くこと」の領域において系統性の違いを明確にすることによって、各学年の授業の方向性が見えてくる（表1）。例えば、「構成の検討、考えの形成」においては、小5・6の「事実と感想、意見とを区別する」から、中1の「事実と意見との関係などに注意して」と根拠を

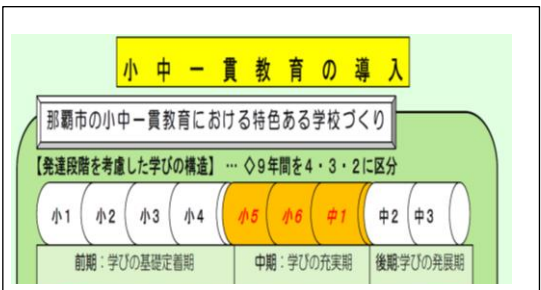


図3 那覇市小中一貫の教育基本構想

表1 小学校第5学年及び第6学年及び中学校第1学年

	(小) 第5学年及び第6学年	(中) 第1学年
○話題の設定、情報の収集、内容の検討（話すこと）	ア 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討すること。	ア 目的や場面に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を整理し、伝え合う内容を検討すること。
○構成の検討、考えの形成（話すこと）	イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。	イ 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的部分と付加的部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えること。
○表現、共有（話すこと）	ウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。	ウ 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。
○構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）	エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。	エ 必要に応じて記録したり質問したりしながら、話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。
○話し合いの進め方（話し合うこと）	オ 互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。	オ 話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること。

明確にすることが加えられている。自分の考えをまとめることにおいては、「話し手の考えと比較しながら」から「共通点や相違点などを踏まえて」となっている。

そこで、本研究では、「話すこと・聞くこと」の領域において、身に付けさせたい力である、相手意識や目的意識を明確にしながら「伝え合う力」を岩手県教育センター『小・中・高等学校国語科授業づくりガイドブック』の「対話の学習過程」を基に進めていく(表2)。生徒には、単元のゴールをイメージさせ、学習計画を通して、対話の目的を踏まえながら、自分の考えを明確に伝えられるよう指導していく。また、学習の振り返りにおいて、学んだことの成果や課題を確認し、課題を明らかにすることで、学びの連続性を意識させながら進めていく。

小中の交流の方法においては、小6の教室と中1の教室はWEB環境を整えオンラインを用いて国語の授業をつなぎ、遠隔地に効果的に伝えたりするために、タブレットを活用する。

表2 対話の学習過程

第一次	① 学習課題(目的・相手)を設定する
	② 表現様式上のモデル学習をする
	③ 学習計画を立てる
第二次	④ 議題を決め、進行表を作成する
	⑤ 自分の考えを明確にする
	⑥ 実技1を実施する
	⑦ 実技1を振り返る
	⑧ 実技2を実施する
	⑨ 実技2を振り返る
第三次	⑩ 単元の学習を振り返る

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 職場体験講話から得た職業観を通して「将来の夢」を伝えよう

～WEBを活用した小6との交流活動をとおして～

教材名 話し合いで理解を深めよう(東京書籍「新編 新しい国語」)

2 単元の目標

- (1) 事象や行為、心情を表す語句の量を増すとともに、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)ウ
- (2) 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕A(1)イ
- (3) 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕A(1)ウ
- (4) 学習課題に関心を持ち、グループでの話し合いに粘り強く取り組み、自分の考えを伝えようとしている。〔学びに向かう力、人間性等〕

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①語彙や語句を豊かに用い、相手に分かりやすく伝えている。 (1)ウ ②意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。 (2)ア	①「話す・聞くこと」において、体験から材料を整理し、事実と意見との関係、自分の考えが明確になるよう伝えている。 A(1)イ ②「話すこと・聞くこと」において、相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫している。 A(1)ウ	①自分の将来や社会生活へつながられるようグループへの話し合いに参加し、学習課題について自分の考えを伝えようとしている。

4 指導と評価の計画(全7時間)

時	主たる学習活動	指導上の留意点	関連事項	評価規準		
1	○本単元の学習内容に見通しをもつ。 話し合いの工夫についてグループでの見通しをもつ。(小6時、小1への読み聞かせの様子)	・小6時の発表の様子を振替させ中1で付けられる力を考えさせる。	・中1国語の授業の発表時を振り返る。	知	思	態
2	○自分の考えと相手の考えと根拠が明確になるように、事実と意見とを関連付け「三角ロジック」を使って意見を出していく。	・講話内容と伝えたいことの写真や記事の選択をさせる。	・総合的な学習の時間の将来の職業調べの資料の考えや意見をまとめる。	② ワ	① ② ワ・ 観	① 観

3・4	○情報の中から伝えたい内容をグループで話し合い、資料を作成することができる。 ・タブレットでの写真の貼り付け、分かりやすいレイアウトの作成を行う。		・「話すこと・聞くこと」領域において、話し方の工夫の小6と中1との違いを考えさせる。		・「総合的な学習の時間」での職業人講話のメモやインタビュー内容、写真等を使用する。	② ワ	① ② ワ・観	① 観
5	○グループごとに小6に相手意識や目的意識を持って伝え合うことができる。 ・作成した記事をタブレットで提示し発表。 ・話し方の工夫を確認しながら伝える。		・小6に分かりやすく伝えるよう工夫を促す。		・小6は「話し手の考えと比較しながら、考えをまとめる」の項目に沿って行う。チェック表にて、発表を聞いての感想を書く。	① 観	② ワ・観	① 観
6	○小6からのフィードバックした点を練り直し、記事や伝え方の再構成を行うことができる。 ・各グループで録画し、相互でアドバイスをを行う。		・前時のチェック表から、良かった点、上手く伝わらなかった点を各グループで話し合い再構成の視点を促す。				① ワ・観	① 観
7 本時	○小6へ「職業体験講話から得た職業観を通して「将来の夢」を全体の場で発表することができる。 ・話し方の工夫を確認しながら伝え合う。		・小6からのチェック表や感想を受け再構成を行ったところを明示しながら発表させる。 ・振り返りを発表。		・小6は5時とどう変わっているかを確認しながら聞き、感想を書く。	① 観	② ワ・観	① 観

5 本時の学習指導（第7時）

- (1) 本時のねらい 自分の考えが分かりやすく伝わるよう工夫しながら表現することができる。
- (2) 本時のめあて 職場体験講話から得た職業観を通して「将来の夢」を伝えよう。
- (3) 本時の展開

過程	学習活動・形態	言語活動に関する指導上の留意点	具体的な評価規準と評価方法
導入 5分	【13：30～13：35】（5分） ・小中一斉に児童生徒、それぞれの本時の学習活動を確認する。	○小中オンラインで一斉につながっているかを確認。 ○小中の児童生徒に本時の目標の確認し、見通しを持たせる。	
展開 （35分）	【13：35～14：10】（35分）  ・相手からのフィードバックをもとに再構成を行い発表する。 ・1～7グループ発表（各5分）	○5時の各グループでの発表時、小6からのフィードバックをもとに、再構成をした箇所の確認を促す。 ○各自グループ発表終了後の振り返りチェック表記入の声掛けをする。 ○全体の様子を観察しながら、声かけ。 	【思】A(1)ウ ○相手の反応を踏まえながら自分の考えが分かりやすく伝わるように構成を工夫しながら表現しようとしている。（ワークシート・観察） 【態①】 ○グループで協力しながら自分の考えを伝えようとしている。（観察）
まとめ	【14：10～14：20】（10分） ・小6、中1ワークシートに振り返りを記入し提出する。（2～3人程度感想を話す）	○小6：チェック表にて、中1の発表を聞いての感想や意見を書く。 ○中1：今日の発表の振り返りを行う。	【態①】 ・本時の学習を振り返り、次の単元へつなげようとしている。

IV 仮説の検証

本研究では、総合的な学習の時間の職業人講話を通して、自分の将来の夢を考えながら、異年齢交流を通して社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むことができたか、生徒が作成したプレゼンテーション資料やワークシート、発言内容、行動観察、事前事後のアンケート等を分析して行う。

1 教科等横断的な視点との検証

- (1) 「総合的な学習の時間」との教科等横断的な視点と「伝え合う力」の育成の工夫について

本研究では、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むためには、国語科で指導した基本的な知識や技能等を、教科等横断的な視点により、総合的な学習の時間において活用させる。さらに、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において、言語を用いての構成の仕方、表現の仕方、話し合い活動の工夫を通して、伝え合う力を育む効果の検証を行う。

国語の授業において、総合的な学習の時間に行われた「職業人講話」を教材として用い、ホ

テルの仕事、劇団の仕事、IT 関連の仕事の 3 つの講話の中から 1 つを選び、相手に伝え合うという学習課題を設定した。これまでの話し合い活動において、自分の意見を伝えることはできるが、伝え合った意見をまとめることに戸惑う場面があった。

そこで、話し合い活動の工夫として、個人の資料を基に、ブレインストーミングや KJ 法を用い、グループで 1 つにまとめて可視化できるようにした。また、「三角ロジック」を活用し、主張、事実、理由を明確に示しながら「私は、(主張)と考えます。なぜなら、(事実)のことで(理由)だからです。」と、自分の考えを伝えていくようにした(図 4)。

このように、自分の考えや根拠が明確になるように話し方の工夫を行ったことで、話の中心的部分を踏まえ事実と意見とを関連させ、話の構成を考えながら伝え合う姿が見られた。また「三角ロジック」を活用しグループの意見を 1 つに可視化したことで、共有したお互いの発言を結び付け構築しながら、考えをより深めていく生徒たちの姿も見られた。

構成や表現の工夫として、これまでの新聞の形式から相手により伝わりやすくするために、プレゼンテーションを用いて伝えるようにした。特に構成の工夫において各項目の内容に、今の自分が学んでいることは、将来、社会生活へつながっているということへ関連付けた(図 6)。表現においては、インタビューの内容からはこれが伝えたいと、内容を構築していく交流の場面があった。また、「見出しは体言止めがいい、何かに例えたりするといいいかも」と、既習事項の「表現技法」を活用しながら分かりやすく表現しようと工夫している交流の場面が見られた。このようにグループで共有した情報や資料を基に、集めた材料を比較、分類、整理することで、構成を組み立てたり、項目ごとに伝え合う内容の検討をしたりしながら、考えの形成を深めていく姿が見られた。アンケートの結果からも「グループでの話し合い活動の工夫を通して上手く伝えられたと、多くの生徒が答えている(図 5)。

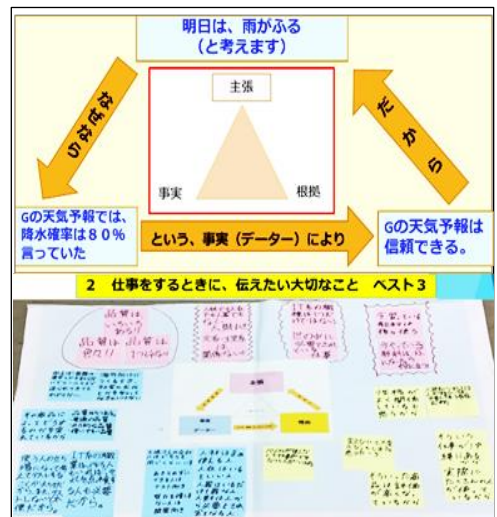


図 4 「三角ロジック」を用いて



話し合い活動の工夫を通して、うまく伝えられたか n = 30	
伝えられた	90%
まあまあ伝えられた	10%
あまり伝えられなかった	0%
伝えられなかった	0%

図 5 授業の様子とアンケート結果

①講話内容	②講話から伝えたい事ベスト 3	③この仕事と教科との関連
★資格よりも人を助けたいと思う気持ちの方が求められる。 ★お客さんを優先して対応する。 ★ホテルで働く時に必要な能力 ・コミュニケーション力 ・臨機応変な対応力 ★それぞれの国で違う観光業の重要な点 ・韓国...早さ(荷物の届けなど) ・アメリカ...フレンドリー(あいさつなど) ・日本...丁寧さ(言葉遣い)	1位 お客さんを大切に思う事 2位 コミュニケーションをする事 3位 色々な事に興味を持つ事	国語 読解力や表現力、文書を読む力が必要だから。 英語 世界の人々と話すには、日本語以外言葉を学ぶ必要があるから。 理科 スマホが高機能にならないように内部の部品配置を上手に構成するから。 社会 国の歴史や、社会情勢を知っておく必要があるから。 体育 良い仕事を長く続けたり、やりたいことを続けるためには体力が必要だから。
④今後、授業へこのように取り組んでいく	⑤社会へつなげていく伝え合う力とは	⑥私の将来の夢
●この講話を聞いて、今やっている勉強など、どの教科も将来、いろんな場面でもつながって役に立ってくるのがわかったので、自分の夢や目標に向けて、しっかり取り組んでいきたいです。 ●仕事をしている中で人から必要とされ、みんなと楽しめるような人に将来なれるように、コミュニケーションをとっていききたいです。また、どの仕事でも必要な、対応力や行動力を身に付けていきたいです。	コミュニケーション能力や学習能力だともいます。また、どんな場面でも堂々と自信を持って、自分の考えをいろんな人に伝える事が出来る力と、これから仕事につき、いろんな年齢の人に接して、いく事ができる力。 そして、いろいろな場面でも、いろんな人の考えを大切に、深め伝えられるようになりました。	5 私(僕)の将来の夢は 女優になることです。 自分が憧れたり、影響を受けたりしたように、自分も誰かに憧れられるような存在になれるようにしたいです。また、自分の演技で人に感動を与えられるような存在になりたいです。

図 6 グループで作成した資料(生徒作成)

以上のことから、職業人講話から学んだことを、国語科の「話し合いで理解を深めよう」の単元教材として扱い、探究プロセスに関連させ、構成や表現の仕方や話し合い活動の工夫を行ったことは、伝え合う力を育む手立てとして有効であったと考察できる。

(2) 社会生活へつなげていく授業の工夫について

本校の1学年の総合的な学習の時間では、将来への夢や自分自身の生き方を考える「働くことを通して、社会生活を見つめ自己の生き方・あり方を考える」というテーマのもと、なりたい職業を調べ、職業人講話から実社会での体験談を聞くことによって、社会生活をより身近なものとして学んできた。その中で将来なりたい職業を描くことはできたが、具体的な将来像がイメージできていないのではないかという課題が見られた。

そこで本研究では、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むためには、「働く意義や学ぶ意義」と関連付けた総合的な学習の時間との教科等横断を図ることで、学びを自分ごととして考えさせることが効果的であると考えた。

社会生活へつなげていく授業の工夫として Society5.0 に関する動画を通し、高度な情報化社会や新たな未来を生きていく中で、「人間だからこそできることは何か」と考えさせた。生徒たちからは「人とのつながりの中で、相手を知ることや、自分を知ってもらうこと」という声が挙がった。そこに働くことや学ぶことを通した職業人講話からの、相手を思う気持ちが大切であるという部分と、話し合いで理解を深めようの本単元を関連付けたことで、話し合い活動を通し自分の考えを再構築していく姿が見られた。特に、「私の将来の夢」において、伝え合う場面での相手意識や目的意識を明確にした自分の将来像が具体的になっている(表3)。

さらに、生徒たちは、今、学んでいるすべての教科が将来の自分へつながっていることに気づき、学びを自分ごととして考えていく姿が見られた。その中で、全グループから挙げられた教科が国語であった。その理由として、「語彙力をつけ人の話を聞き、自分の意見を伝えることが必要だから」「仲間同士でのコミュニケーションや、仕事の会議などの話し合いに必要だから」「相手の言っていることをしっかり理解し、相手に正しく伝えるため」などである。

このことから、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むためには、ただ伝えるだけではなく、伝え方の技法を学ぶ必要性に加え、相手の思いや考えを尊重しながら伝えていくことの大切さを学んでいることがうかがえた。

これらは、検証授業後の「授業において話し合い活動の学習は、これから将来、社会生活を送るときに役立つと思う」と、全員が答えている結果からもうかがえる(表4)。また、1学期に比べより具体的になった将来の夢を、全員が堂々と伝えたことを受け、みんなの夢を聞いて自分も頑張ろうと思ったという前向きな意識の深まりを、ワークシートの感想から多く見ることができた。同時に、将来の職業と関連させながら、相手に伝えている姿を結びつけたことで、社会生活へつなげていく「伝え合う」場面において考え方の変容が生徒全員に見られた(表5)。

以上のことから、国語の授業の伝え合う場面において、「働く意義や学ぶ意義」のテーマに

表3 学びに対する姿勢と「私の将来の夢」

④ 今後授業へこのように取り組んでいきたい	
・どの仕事でも必要な対応力や行動力を身につけていきたいです。今後、普段の生活の中でも笑顔を大切にして、相手の気持ちに寄り添えるようにしていきたいです。	
・今学校で学んでいる勉強はどの教科も将来、いろんな場面でつながって役に立ってることがわかったので、自分の夢や目標に向けてしっかり授業中に取り組んでいきたいと思いました。また、人から必要とされ、みんなと楽しめるような人に、将来なれるように、相手とのコミュニケーションとかもしっかり取っていきたいです。	
⑥ 私の将来の夢	
・助産師になるには、国家試験に合格したら、助産師になることができるからその時に、妊婦の方が母子共に健康にいられるように支えてあげたいです。そして、無事に産まれた赤ちゃんが家族の一員として生きていくことを応援したいです。	
・僕の将来の夢は、船の船長です。船の中にはたくさんの人が乗っているの、みんなの命をせおえる人になりたい。そして、誰かが困ったりしたら、その人を助けられるような人になりたいです。	

表4 アンケートの結果・感想より

授業での話し合い活動の学習は、社会生活の中で役に立つと思いますか。 n=30			
思う	100%	あまり思わない	0%
まあまあ思う	0%	思わない	0%

生徒A：この授業で伝える力がついたと思うし、みんなが自分の将来の夢を楽しそうに語る姿を見て、自分たちの夢が叶うといいなあと思いました。また、そのためにはどんなことにも、一生懸命に取り組むという決意も聞けて良かった。

沿った総合的な学習の時間との教科等横断を図り、教材として関連させることによって、学びを自分ごととしてとらえ、将来の自己の生き方を見つめ考えることは、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むことに有効な手立てであったと考察できる。

表5 社会生活つなげていく「伝え合う」場面における考え方の変容

	第1時（初回授業）	第7時（最終授業）
生徒A	自分が学んだことを教える場面	・最初、将来の自分をイメージすることはできなかったけれど、この授業を通して仕事などで自分の気持ちを伝える場面が想像できました。私の将来の夢は学校の先生になることなので、授業で生徒が理解しやすいように分かりやすく伝える自分をイメージしました。
生徒B	近所づきあいとか、協力するとき	・今までは、自分の意見を言うってただけだったけど、この授業を通して、自分の考えの理由、その理由からどう思うかなど細かい所まで広げられた。私の夢はCAになることなので、お客さんの気持ちになって伝えたい。

2 小中連携授業の交流を通しての検証

本研究では、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むためには、相手意識や目的意識を明確にしながら、同年齢の枠にとどまらない社会生活を意識した異年齢交流の場を設定し、小中の系統性を明確にしながら学びをつなげていくことが必要であると考え、中1と小6の異年齢交流の場を設定した。

第1時において、中1の生徒が小6の頃に行った、小1への自作絵本の読み聞かせの様子を提示し、伝え合う場面においては、相手意識や目的意識を明確にすることが大切であったことを改めて振り返りさせた。また、「話すこと・聞くこと」の領域の系統表を示し、小6の事実と感想や意見とを区別する関連性や、中1の自分の考えや根拠が明確になるように話すことにおいて、小6との違いに気付かせ中1として身につけてほしい力を明確にした。

第5時では、グループで作成したプレゼンテーションを提示しながら小6へ伝え合った。第6時では、小6からの良かったところや改善点のチェックシートを基に、「時間内に伝えるには内容の優先順位をつけ、全体の内容はくずさないように文を短くしよう」「自分の考えを伝えるのだから、書いたものを見ずに相手を見て伝えてみよう」など、課題を分析し解決しながら、グループで話し合う姿が見られた。さらに、「理学療法士ってどんな仕事ですか」「数学って算数のことですか」「コンピューターのソフトを制作するってどんなことをするんですか」などの小6からの疑問や分からないことに対して、説明の仕方をグループで吟味し合い、丁寧に補足をしていく様子が見られた。また、タブレットの録画機能を用い、隣のグループとアドバイスを交流することで、相手に分かりやすく表現する伝え方を深めていくことができた（図7）。

第7時においては、内容や声の大きさ、表情などを工夫し、相手を意識しながら、全員が原稿を見ずに堂々と伝えることができた（図8）。

授業後のアンケートには、小6との異年齢交流を

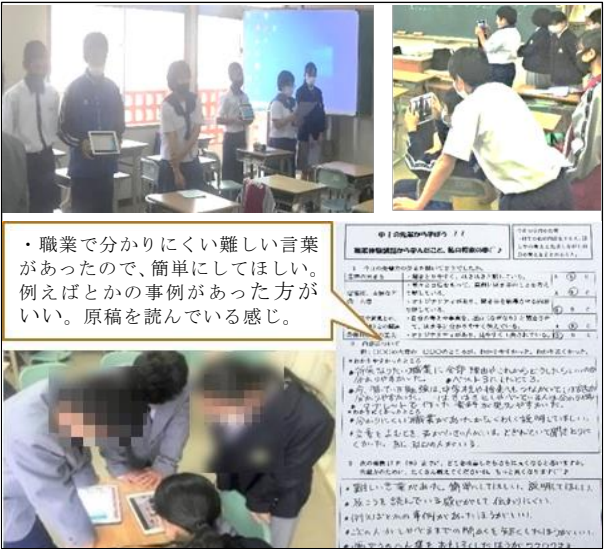


図7 小6からのチェックシートで振り返り



図8 オンラインで小6との授業の様子

表6 異年齢交流を通して意識の変容

小6との異年齢交流で相手を意識し伝え合う力がついたと思いますか n=30			
思う	100%	あまり思わない	0%
まあまあ思う	0%	思わない	0%
異年齢を意識して分かりやすい言葉を選びましたか n=30			
選んだ	92%	あまり選ばなかった	0%
まあまあ選んだ	8%	選ばなかった	0%
小6からのフィードバックで改善しましたか n=30			
改善した	100%	あまり改善してない	0%
まあまあ改善した	0%	改善しなかった	0%
生徒A:これから僕たちは、将来いろんな年齢の人たちと交流があると思う。その中で、相手に分かりやすい言葉を選び、自分の考えを伝えていきたいと思う。			

通して相手を意識した伝え合う力がついたと思うと全員が答えている(表6)。授業後の振り返りには、異年齢(年下)に対し、内容をグループや個人で何度も推敲したり、工夫したりして伝えることができて良かったと多くの生徒が記述している(表7)。

小6からは、第5時の伝える様子に比べ「改善されていた」と98%の振り返りがあり(表8)、自分が行ったアドバイスが改善されていて、良く伝わったという感想が、ほぼ全員の児童から挙げられていた。感想には、「将来の夢に向かって進んでいる先輩方はすごいなと思いました」と、先輩への思いを通して、自らも将来の夢を語りながら、これからの成長へつなげていこうとする姿勢が見られた。また、中学校の様子に触れたことで、普段の授業を頑張って4月から始まる中学校生活に生かしていきたいと、期待へつなげていく姿も垣間みることができた(表9)。

これらのことを踏まえ、生徒たちは社会生活において異年齢層に対し、お互いの考えを伝え合うには、言葉を精選していくことの大切さを学ぶことができたと考察する。同時に、学びの系統性を明確にし、校種間を超えた中1と小6との小中連携授業を位置づけたことは国語の授業改善において、生徒たちをよりよい成長へつなげ、伝え合う力を育むことに有効な手立てであったと考える。

表9 小6から中1へ振り返りと感想

小6A: 僕が今日の授業で気をつけたことは、目標にもあるように、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめることです。先輩方の考えと自分の考えを比較しながら、聞くことができました。学んだことは、お客さんとのコミュニケーションが大切で、大きな責任を伴うということです。将来の夢を考えながら進んでいる先輩方はすごいなと思いました。僕の将来の夢は弁護士になることです。僕も将来仕事をするときに、どんな人とでもコミュニケーションができて、相手のことを考えて話すことができるようになりたいです。

小6B: 今日の発表ありがとうございました。前の時間に私たちが伝えた、はきはきと伝えていない所や早口の所、相手の目を見ないで話している所などが改善されていて、とても分かりやすく伝わりました。働く人の熱心な気持ちを知ることができて、頑張ろうと思いました。普段の授業や、学校生活を大切にしていきたいと思います。あと64日で中学生活が始まります。今、先輩方が話してくれたことを、中学校生活に生かしたいと思います。

3 単元全体を通しての検証

本単元の目標は、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育成することである。その手立てとして2つの柱で行ってきた。1つ目に、総合的な学習の時間との教科等横断的な視点から、探究プロセスと関連させ、相互の学びを深めながら「話すこと・聞くこと」の領域において、言語を用いて伝え合う力を育む効果の検証と、「働く意義や学ぶ意義」を通して、学びを自分ごととして考えさせる検証である。2つ目に、系統性を明確にしながら小中との学びをつなげ、同年齢の枠にとどまらない社会生活を意識した小6との異年齢交流の場の設定を通しての検証を行った。これらの検証を通して、検証前に比べ、検証後は、「社会生活をイメージしながら伝え合うことができた」と、生徒たちの意識の高まりに変容が見られた(図9)。このことは、1学期から取り組んできた総合的な学習の時間において、将来の夢を描きながら、職業人講話から実社会で働く人の話を聞いたことで、生徒たちが社会生活をより一層イメージしやすくなった効果が挙

表7 フィードバックを通して工夫したこと

- ・異年齢(年下)へ伝えるときに、自分の考えやグループで学んだことを相手に伝えるために、文を何回も考え直したので、とても伝えやすかったし、将来の夢を伝えることができて良かった。
- ・内容を分かりやすく伝えるために、文を短くして、難しい言葉は使わないようにした。「なぜなら、そのためには」の接続詞をつけて分かりやすいように伝えた。
- ・文が長すぎると、意味が分かりにくいので、なるべく重要な所だけを押さえて伝えるように工夫した。
- ・5分以内におさめないといけないので、伝えたい内容に優先順位をつけた。自分が6年生の時はわからなかった言葉は使わないように意識した話ことばだけでなく、パワポの文字も分かりやすく要点で伝えるようにした。
- ・6年生からの意見を聞いて、直すときが一番印象に残りました。内容や声の大きさなどどうしたら分かりやすく伝えられるのかグループで話し合っ、お互いに「こうしたらいいいじゃない」とアドバイスや協力したりできたので良かった。

表8 小6から中1へ振り返り

アドバイスは改善されていましたか(小6解答)			
改善されていた	98%	あまり改善されていなかった	0%
まあまあ改善されていた	2%	改善されていなかった	0%

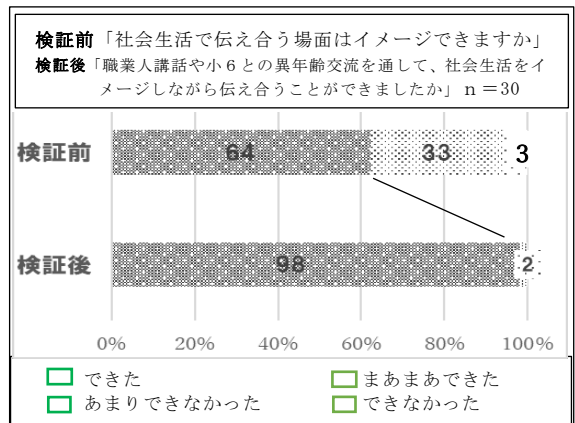


図9 社会生活へ向けて「伝え合う」意識の変容

げられる。また、個人の意見を互いに交流させることによって、疑問点や新たな問いへの課題解決を図り、全体で共有し深めていった生徒たちの主体的に学ぶ姿勢を通しての結果であったと分析することができる。

今後の課題としては、人前で話すことに苦手意識を持っている生徒に対して、できたことを褒めながら指導を継続していく。「まあまあできた」と回答した生徒は、当日は前を向いて堂々と自分の考えを伝えていた。授業後の本人の感想には「僕は人前で話すことは苦手だけど、今回の授業でよい経験になって良かった」とあった。

表 10 単元の評価基準

A 評価	・情報を整理し、事実と意見と根拠とを関連付けながら相手の反応を踏まえ、自分の考えが分かりやすく伝わるように、声の大きさ、表情などを工夫して伝えている。	94%
B 評価	・情報を整理し、事実と意見と根拠とを関連付けながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように伝えている。	6%
C 評価	・情報を整理し、事実と意見を区別し自分の考えを伝えている。	0%

単元の評価については、基準をA・B・Cに区分し評価を行った。方法として、内容の構成においては、「ワークシートより、意見と根拠の整合性が関連されているか。社会生活を意識した意見になっているか」を基準にし、表現においては当日の発表時の様子をループリック表に合わせながら聞き手を意識した表現になっているかの基準で行った(表10)。その結果、B評価以上が100%となり、伝え合う力の育成が図られた。

以上のように、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域において「総合的な学習の時間」との教科等横断を図り、小6との異年齢交流授業を通して、社会生活へつなげていく「伝え合う力」の育成の検証を行った。その結果、生徒たちが自分の思いや考えを進んで伝え合ったり、相手の思いや考えを進んで理解しようとしたりする姿から、社会生活へつなげていく「伝え合う力」を育むことができたと考える(表11)。また、未来へ向けて自分を描きながら、将来の夢を堂々と語ったこの経験を大きな通過点として、将来へつなげていってほしいと願う。

表 11 社会生活へつなげていく「伝え合う力」のまとめ

1 グループ：社会生活へつなげていく「伝え合う力」とは、相手のことを考えて何を伝えるか、相手側からして分かりやすく伝える力だと思います。また、どんな場面でも堂々と自信を持って、自分の考えをいろんな人に伝える事が出来る力と、これから仕事につきいろんな年齢の人に接していく事ができる力も大切だと思います。そのためには、人との触れ合いの中で相手を思いやる気持ちを大切にしていきたいです。
2 グループ：将来の社会生活で大事なことは、報告・連絡・相談、コミュニケーション能力、体力、忍耐力、集中力、対応力、語学力。なぜなら、これらの力は社会に出てどこかの場面、例えば、仕事をしている時や接客をしている時、会社の職場関係など、その他の場面でも必要だと思うからです。
3 グループ：社会生活へつなげていく「伝え合う力」とは、私達は、人との関わり方や、礼儀、コミュニケーション能力、信頼関係などの相手に伝えやすくするための力が必要だと考えます。
4 グループ：社会生活から、イメージする事は、仕事を通して、または、地域社会の中で、人と人がコミュニケーションを取って、助け合いながら生きている場面がイメージされます。その中で、自分の考えをしっかりと持って、考えることが大切な力だと思います。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 総合的な学習の時間との教科等横断的な視点から、探究プロセスの「整理・分析」「まとめ・表現」の部分と関連させることによって、生徒は分かりやすく伝え合うことができた。
- (2) 総合的な学習の時間の「働く意義や学ぶ意義」の視点を、国語の教材として用いたことで生徒たちは、学びを自分ごととしてとらえ、社会生活をイメージしながら伝え合うことができた。
- (3) 小中の系統性を明確にし、中1と小6の異年齢交流を通して、相手意識や目的意識を持ち言葉を選選しながら伝え合おうとする姿が見られた。

2 課題

- (1) 話すことに苦手意識を持っている生徒に対し、目的や場面に応じた場の設定を明確にししながら、成功体験へつなげていくよう継続的な指導の工夫が必要である。
- (2) 授業で身に付けた社会へつなげていく「伝え合う力」の継続と、他の教科等との連携を図りながら授業計画の工夫が必要である。

〈参考文献〉

- 田中博之 2020 『主体的・対話的で深い学び 学習評価の手引』 教育開発研究所
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2020 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資【中学校国語】』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』 東洋館出版社
- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総合的な学習の時間編』 東洋館出版社
- 田近洵一・井上尚美・中村和弘編 2018 『国語教育指導用語辞典』第五版 教育出版
- 吉富芳正 2017 『「社会に開かれた教育課程」と新しい学校づくり』 ぎょうせい
- 文部科学省 富山哲也 2011 『〈単元構想表〉でつくる！中学校新国語授業』 明治図書出版

〈参考WEBサイト〉

- 岩手県立総合教育センター 2016 「平成 27 年度版学習指導要領を具体化する小・中・高等学校国語科授業づくりガイドブックコミュニケーション能力を高める「話すこと・聞くこと」編
http://www.h27_0106_4kokugo.pdf (iwate-ed.jp) (最終閲覧 2021 2 月)
- 京都市教育センター 2005 「伝え合う力を育てるための国語科教育の在り方」
<http://www.kyotocity.ed.jp/taxonomy/term/1214> (最終閲覧 2021 2 月)